

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：30123

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370392

研究課題名(和文) 近現代ロシアにおけるスポーツ表象の諸相と系譜

研究課題名(英文) Aspects and Tradition of Sports Images in Modern Russia

研究代表者

岩本 和久 (Kazuhisa, Iwamoto)

稚内北星学園大学・情報メディア学部・教授

研究者番号：40289715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：近現代ロシアにおけるスポーツ表象の系譜について、文学、映画、美術の3領域について検討した。文学領域や映画領域の研究では、帝政期に「運命との対決」として理解されていたスポーツが、スターリン期に国防の基盤として、「雪どけ」期には日常的かつ個人的な喜怒哀楽の場として把握されるようになったことを明らかにした。美術の領域では現代ロシアの作品を分析し、そこでスポーツが不毛な反復として理解されながらも、その不毛さを覆す根源的なエネルギーが身体のうち認められていることを明らかにした。また、モスクワとソチというかつての五輪会場を視察し、それぞれの都市のイメージとスポーツ施設の関わりについて考察した。

研究成果の概要(英文)： In this study, we analyzed the tradition of Russian sports images in literature, film and art. In literature produced before the Russian Revolution, we found that sports were considered as the trials of destiny. During the periods of Stalinism, they were connected with militarism, and in the later period of "thaw," they became a part of the individual's usual life. In the field of Russian arts, we found that contemporary artists, like G. Bruskin and AES+F, see both unproductive repetition and potential energy in sports. We also visited Moscow and Sochi, and analyzed the legacies of the Olympic Games in both cities.

研究分野：ロシア東欧文学

キーワード：ロシア東欧文学 ロシア・スラブ地域研究 表象文化論

## 1. 研究開始当初の背景

スポーツはソヴィエト文化を特徴づける重要な要素である。1920~30年代には社会主義体制を支える「新しい身体」が求められ、冷戦下の五輪ではソ連のスポーツが全世界から注目された。

一方で、ソヴィエトのスポーツ表象の研究はまだ緒に就いたばかりで、スポーツ美術を論じた M. O'Mahony, *Sport in the USSR* (2006), あるいはハンブルグでのシンポジウムをもとにした論集 N. Katzer, S. Budy, A. Köhring, M. Zeller (eds.), *Euphoria and Exhaustion* (2010) を先駆的な例として挙げることができるにとどまっていた。

ソ連解体後、衰退するかに思えたロシアのスポーツだが、プーチン体制下では国营スポーツ・テレビチャンネルの開設、冬季オリンピックやサッカー・ワールドカップの誘致など、スポーツ振興に力が注がれてきた。このような現代ロシアの状況に連なるスポーツ表象の系譜をたどることは、社会的な理想像の変化を明らかにし、ロシア文化史に新しい側面を加えられると考えられた。

## 2. 研究の目的

19世紀後半以降のロシアでなされた表象(文学、映画、美術、建築)を対象に、スポーツ・イメージに込められた社会的な願望やその系譜を明らかにすることを目指した。社会的に期待される肯定的な、あるいは否定的なイメージが提示されるのが表象の領域であり、その分析は社会がスポーツをどのように理解してきたのかを考える上で、通常行われているメディア分析と同様に大きな意義を持つと考えられるからである。

### (1) 文学

文学の領域では、19世紀から20世紀初頭にかけての自らがスポーツ活動に携わった作家や、ソ連期のスポーツ文学のジャンルで活躍した作家を対象に、作家とスポーツの関わりの変遷、神話的な物語の成立過程を明らかにしようとした。

### (2) 映画

ロシアのスポーツ映画はローム『未来への迷宮』やバルネット『レスラーと道化師』などの例外を除くとほとんど日本で知られていないため、映画については、ロシアにおけるスポーツ映画の歴史、主題や物語の諸相を把握することを目指した。

### (3) 美術

ソ連のスポーツ美術についてはロトチェンコやデイネカなど広く知られており、先行研究も充実している。したがって、美術の領域ではそれらソ連の芸術とソ連解体後のアーティストとの関わり(影響関係や断絶)を明らかにすることを目指した。

### (4) 建築

建築に関しては、1920~30年代のモスクワ再開発、モスクワ五輪、ソチ五輪などについて、スタジアムの設計や大会後の「記憶の継承」の在り方を分析し、それによりスポーツ文化の社会的な意味や機能、その変化を明らかにすることを目指した。

## 3. 研究の方法

ソ連や現代ロシアの文化研究に従事してきた岩本和久(代表者)、ロシアのサッカー文化や東欧の視覚芸術の研究に従事してきた大平陽一(分担者)の2名で研究体制を構築した。また、スポーツ社会学を専門とする侘美俊輔に体育学の立場からの助言を仰いだ。

文学や映画の資料を分析した他、ソ連期や現代のアート作品についての現地調査をヴェネツィアやモスクワで、建築や都市設計についての現地調査をソチやモスクワで行った。

また、研究会やセミナーを毎年、開催し、研究の進捗状況の確認と成果発表を行った。

## 4. 研究成果

### (1) スポーツ文学の系譜

19世紀のトルストイから20世紀後半のトリフォノフに至る、ロシアにおけるスポーツ文学の系譜を明らかにした。

帝政期から20世紀初頭にかけての近代スポーツ黎明期には、作家たち自身がスポーツ活動に参加していた。そのような作家として、乗馬やテニスに勤しんだトルストイ、レスラーだったクプリーン、少年時代からサッカーをプレイしていたナボコフやオレーシャの名を挙げることができる。

そのような帝政期のロシア文学においては、主人公が運命と対決する場としてスポーツが描かれている。たとえば、トルストイ『アンナ・カレーナ』の競馬やクプリーン「サーカスにて」のレスリングで、主人公は運命的な敗北を遂げることになる。このようなスポーツ理解は、革命後に欧米に亡命し、作家として大成したナボコフの場合も変わらない(『偉業』)。

一方、スターリン期のソ連文学において、スポーツは国家に奉仕するものとなった。オレーシャ『羨望』やカッシーリ『共和国のゴールキーパー』においては、外国の攻撃からソ連を守る愛国的な存在として、ゴールキーパーが描かれる。

「雪どけ」期になるとスポーツ雑誌が発達し、詩人エフトゥシェンコや小説家トリフォノフが記事を執筆しただけでなく、作品も掲載するようになった。スターリン期の国家主義に代わり、個人の価値が尊重されるようになった時代を反映し、これらの作品においては、個人的かつ日常的な喜びや悲しみの場としてスポーツが描かれている。

以上の成果については、論文「近代ロシア

文学におけるスポーツ表象の変遷 トルストイからトリーフォノフまで」にまとめ、『スラヴ研究』62号に掲載した(5)。

### (2) スポーツ映画の系譜

ソ連期のスポーツ映画について、劇映画やドキュメンタリー映画、スポーツ映画祭などの概況を調査した。

また、特にサッカーを主題としたソ連期の映画を分析し、国防色の強かったスポーツがビジネスへと変質していく過程をたどった。

スターリン期の1936年に制作された映画『ゴールキーパー』はカッシーリの小説を原作とするものだが、試合に臨む選手たちが飛行機からスタジアムのフィールドへパラシュートで降下するという、ミリタリズムにもとづく場面が挿入されている。

1962年に制作された映画『第3ピリオド』は、第2次世界大戦中にドイツ軍占領地で行われた、ドイツ人とソ連人捕虜のサッカー試合を描いている。「死のマッチ」として神話化された物語を映画化したものだが、従順な愛国心というよりは、権力への反抗の精神にもとづいていることが、『ゴールキーパー』との違いだろう。

トリーフォノフの小説を映画化した『スタンドで何がわかるか』(1975年)は、サッカー選手の移籍をめぐる感情の揺らぎをテーマとした作品だが、そこではもはやサッカーは国家を支えるものではなく、選手個人が才能を発揮する場となっている。

### (3) ロシアのスポーツ美術

ソ連期のスポーツ絵画についてはすでに十分な情報を持っていたが、ルジニキ・スタジアム60周年を記念してギャラリー「ヴィンザヴォート」で開催された、ソ連期のスポーツ・ポスター展「生よりも多く」を視察することで、ソ連のポスターのデザインとその現代的評価を把握することができた。

また、現代ロシアのアーティストのうち、特に2015年のヴェネツィア・ビエンナーレで展示されたブルスキンの『考古学者のコレクション』やAES+F『Inverso Mundus』について分析し、ソヴィエト文化の回顧や現代社会の批判といった社会的な文脈を確認した上で、これらの芸術家たちが社会構造を覆す根源的なエネルギーをスポーツの中に見出そうとしていることを明らかにした。

ブルスキンの『考古学者のコレクション』は、ソ連の文化を象徴する彫像群が発掘されたという設定のインスタレーションで、古代ローマの遺跡やモスクワの映画館の廃墟を利用して、展覧会が開催されてきた。2015年のヴェネツィアでの展示は、19世紀に閉鎖された聖カテリーナ教会を舞台としている。

彫像群の中にはスポーツ文化を象徴するアスリート像もある。頭や腕のもげたトルソーはソヴィエト文化の終焉を表しているが、張った胸や太い腿、男性器のふくらみは洗剤

的なエネルギーがまだ失われていないことを示している。

AES+F『Inverso Mundus』は「さかさまの世界」を描いた中世の風刺画に発想を得たビデオ・アートで、貧と富、男と女、若さと老い、人間と動物といった強者と弱者の関係が転倒した世界を描いている。

AES+Fは『Inverso Mundus』だけでなく、『トルマルキオの饗宴』や『Allegoria Sacra』といった過去の作品でもスポーツのモチーフを取り上げている。スポーツはそこで「不毛な反復」として提示されるのだが、同時に非白人のスポーツ・プレイヤーは宇宙的なエネルギーの流れを体現してみせる。これらはブルスキンの『考古学者のコレクション』と同様、スポーツの中に死と生の双方を見ようとした作品と言えるだろう。

以上については、論文「死と再生 現代ロシア美術とスポーツ」にまとめ、『稚内北星学園大学紀要』16号での報告を行った(5)。

### (4) 2つの五輪と「記憶の継承」

20世紀末から21世紀にかけての欧米におけるスタジアム設計の理念の変化(市民スポーツから商業コンプレクスへ)を確認した上で、モスクワとソチの五輪施設について現地調査を行い、それぞれの特徴と「記憶の継承」の在り方を明らかにした。

モスクワ五輪の施設はその多くが、スポーツ大会やイベント会場、市民のスポーツ施設として、現在も活用されている。中でもユニークなのは、自転車競技やボート競技の会場として開発されたクルイラツコエ地区だ。

緑に囲まれたスポーツ施設群が住宅地に隣接しているこの地区では、自然環境と住空間、市民スポーツ活動がユートピア的な調和を見せている。ここを舞台とした小説『降雪への道』を執筆したアントン・ウトキンはそのテキストやそれに関する新聞インタビューで、この地区の牧歌性を讃えている。

冬季五輪の会場となったソチはスターリン体制下で保養地として発展した土地だが、帝政期には皇帝一家の別荘も存在しており、そもそもが国家主義と親和的な場所である。

オリンピックの終了後もスキー場の経営には半国営のガス会社「ガスピロム」や、ロシア最大の銀行「ズベルバンク」が携わっており、国威発揚の性格は消えない。F1やサッカー・ワールドカップなど、大きなスポーツイベントの会場としても活用され、現代ロシアのスポーツ文化の拠点としての地位を維持しようとする努力が続いている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10件)

太平陽一、帝政ロシアと在外ロシアの《ソコル》: 体操運動とナショナリズム、天理

大学学報、査読無、68-2号、2017、  
pp.93-104、  
<https://opac.tenri-u.ac.jp/opac/repository/metadata/4185/GKH024407.pdf>  
岩本和久、死と再生 現代ロシア美術と  
スポーツ、稚内北星学園大学紀要、査読  
無、16号、2016、pp.39-48、  
<http://id.nii.ac.jp/1079/00000381/>  
岩本和久、近代ロシア文学におけるスポ  
ーツ表象の変遷 トルストイからトリー  
フォノフまで、スラヴ研究、査読有、  
62号、2015、pp.237-255、  
[http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publ  
icn/slavic-studies/62/pdf/RN237.pdf](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicn/slavic-studies/62/pdf/RN237.pdf)  
岩本和久、1920-30年代のロシア文学に  
おけるゴールキーパーのイメージ、ユジ  
ノサハリンスク経済法律情報大学・稚内  
北星学園大学国際学術研究コンファレン  
ス、査読無、2015、pp.11-18  
大平陽一、第一波亡命ロシア人の回想と  
世代の問題、天理大学学報、査読無、67-1  
号、2015、pp.19-33  
[https://opac.tenri-u.ac.jp/opac/repo  
sitory/metadata/3702/GKH024002.pdf](https://opac.tenri-u.ac.jp/opac/repository/metadata/3702/GKH024002.pdf)  
岩本和久、現代ロシア文学とSF的想像力、  
ロシアSFの歴史と展望、査読無、2015、  
pp.41-46、  
[http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publ  
icn/slavic\\_eurasia\\_papers/no7/41.pdf](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicn/slavic_eurasia_papers/no7/41.pdf)  
大平陽一、カレル・タイゲのブックデザ  
イン：ポエティズム、構成主義、シュル  
レアリスト、そして機能主義、チェコ・  
シュルレアリスムの80年、査読無、2015、  
pp.33-57  
岩本和久、『アンナ・カレーニナ』のスポ  
ーツ描写の諸相、SLAVISTIKA、査読無、  
2014、pp.67-74、  
[http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.  
jp/dspace/bitstream/2261/60862/1/SLA  
0300009.pdf](http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/60862/1/SLA0300009.pdf)  
大平陽一、ソ連崩壊後のスポーツクラブ、  
モスクワ大学「アクロバットロックンロ  
ール」代表団訪問の記録、2014、pp.15-16  
大平陽一、ヤーコブソンの交友関係から  
見たプラハ学派の文化的コンテクスト：  
そのいくつかの側面、スラヴ学研究、査  
読有、18号、2014、pp.51-85

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：

種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

岩本 和久 (IWAMOTO Kazuhisa)  
稚内北星学園大学・情報メディア学部・教  
授  
研究者番号：40289715

##### (2) 研究分担者

大平陽一 (OHIRA Yoichi)  
天理大学・国際学部・教授  
研究者番号：20169056

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

( )